

# Karen Brown, Mad dogs and meerkats -- a history of resurgent rabies in Southern Africa (書評)

|     |  |
|-----|--|
| 著者  | 楠 和樹   |
| 権利  | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a> |
| 雑誌名 | アジア経済  |
| 巻   | 56   |
| 号   | 2  |
| ページ | 130-133  |
| 発行年 | 2015-06  |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所   |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2344/00006872">http://hdl.handle.net/2344/00006872</a>  |

Karen Brown,

*Mad Dogs and Meerkats:  
A History of Resurgent  
Rabies in Southern Africa.*

Athens: Ohio University Press, 2011,  
xiv+234pp.

くすのき かず き  
楠 和 樹

I

本書は19世紀以降の南部アフリカ、とくに南アフリカとジンバブウェ（旧南ローデシア）における狂犬病の歴史を辿ったものである。19世紀以降現在にいたるまで、狂犬病を含む感染症に关する科学的理解は着実に進歩してきた。1870年代までにフランスのパストゥール（Louis Pasteur）とドイツのコッホ（Robert Koch）らの尽力によって、結核や炭疽病などの感染症を引き起こす細菌が発見され、それまでの疾病観と対処方法は刷新された。とくに狂犬病の対処方法については、罹患したかどうかを判定する方法と、ワクチン接種による暴露後予防の方法が1880年代にパストゥールによって考案されたことによって、新たな局面を迎えることになった。また、1940年代には、より安全で効果の高い、Flury-LEP株を用いたワクチンがアメリカで開発されている。これらの科学技術の進歩にもかかわらず、サブタイトルに含まれた「再燃」（resurgent）という語が示唆しているように、20世紀を通じて南部アフリカの各地域で狂犬病は、度々流行してきた。本書は、19世紀以降流行を繰り返してきた狂犬病とこれに対する人々の対応の歴史を、とくに環境と政治、社会経済という3つの文脈のなかに位置づけながら考察した著作である。以下ではまず、序章につづく7つの章からなる本書の内

容を紹介する。

II

第1章「旅行者と医師——南アフリカにおける狂犬病の過去と現在——」では、19世紀に南アフリカで、この地に狂犬病が存在しているのかどうかをめぐって白人の旅行者や医師、宣教師などのあいだで交わされていた議論の内容が検討される。18世紀から19世紀にかけてイギリスと西ヨーロッパで流行し、数百人の命を奪った狂犬病は、1893年に南アフリカのケープ植民地の湾港都市ポート・エリザベスで流行するまで、南部アフリカでは存在が確認されていなかった。そもそも、パストゥールが感染の有無を判定する方法を考案するまで、特定の人間や動物が示す特定の症状を狂犬病と判定するための決定的な科学的方法は存在していなかった。そのため、狂犬病は感染によって生じるのか自然に発生するのか、あるいは熱帯の気候とのあいだに何か関係はあるのかといった点についても、複数の見解が併存している状態だった。このような状況下で狂犬病の存在の有無をめぐって交わされた議論では、おもに南アフリカに滞在していた白人の旅行者や医師などの直接的な観察経験が根拠とされ、白人の入植以前から住んでいたアフリカ人社会の経験や知識が参照されることはなかった。また、狂犬病に関する確かな科学知がなかったこの時期には、のちの時代とは対照的に政府が積極的に感染症対策に乗り出すこともなかった。

第2章『『小さなベス』での死——ポート・エリザベスにおける狂犬病の流行——』では、ポート・エリザベスで1893年に流行した狂犬病が、社会、医療、政治の3つの側面から考察される。このときの感染源とされる1匹のエアデール・テリアは、イギリスからの輸送中に発症することなくケープ植民地へと持ちこまれた。当時「小さなベス」と愛称され、商業と金融で栄えていたポート・エリザベスには、イギリス中流階級の文化的実践を模倣することによって自らの富と影響力を誇る一群の人々が登場していた。狩猟やドッグショーの開催は、彼らが追い求めた趣味活動の一環であり、感染源となったテリアを含めてヨーロッパから輸入された品種の犬は、彼らの高い地位を象徴する存在となっていた。

医療の側面からみたとき、ポート・エリザベスでの流行は、上に述べたように疾病に対する理解が大きく変容しつつある時期と重なっていた。ケープ植民地では流行が確認されると、感染症の封じ込めを狙った従来のアプローチに加えて、予防のためにワクチン開発がすすめられた。しかし、結果的に流行の収束までにワクチン開発は成功しなかったうえに、狂犬病の存在と原因論に関する公衆の疑念は絶えなかった。また、感染地域内外での動物の移動を禁止し、飼い犬への口輪の装着を義務づけ、野良犬を殺処分するという、感染に際して政府がとった措置に対して、白人とアフリカ人の双方から反対の声があがった。とくに、人種的に階層化された当時の想像力のなかでは、アフリカ人の所持する犬は白人中流階級のそれよりも劣っていて狂犬病に罹患しやすいとされており、規制のおもな標的とされた。

「ザンベジ川を渡る——南ローデシアにおける流行——」と題された第3章では、南ローデシアと南アフリカで1901年から1913年までつづいた狂犬病の流行に対する、人々の対応について検討される。狂犬病ウイルスは、国境を越えて北ローデシア（現ザンビア）から南ローデシアに到来したとされている。植民地化とともに国境にあたるザンベジ川には道路と鉄道が敷設され、人とモノの移動が容易になっており、ウイルスの拡散にとって好都合な状態が整えられていた。このときすでに、ワクチン接種による予防という方法が可能であったにもかかわらず、南ローデシアでも、これと隣接する南アフリカのトランスヴァール共和国でも、感染地域内外の犬の移動制限と犬の殺処分という従来からの方法が、各地のアフリカ人の首長からの協力のもとで採用された。名目上、これらの措置は人種に関係なく施されることになっていたが、ポート・エリザベスの流行時と同様に、このときもアフリカ人の所持する犬は白人（アフリカーナー）のそれよりも狂犬病に罹患しやすいとされ、標的となった。とはいえ、南アフリカではナタール共和国でバンバサ暴動が勃発していたこともあって、政府は狂犬病から国を守るという公衆衛生上の目標に、白人支配に対するアフリカ人の不満を抑えて公衆の秩序を維持するというもうひとつの目標との兼ね合いのなかで取り組まざるをえなかった。前世紀とは異なり、感染症対策のなかでアフリカ人の声にも耳を傾けなければならない

時期を迎えていたのである。

ミーアキャットやジェネット（*Genetta felina*）などの野生動物が感染するウイルスの変種の存在が確認されると、それまで犬によるウイルスの媒介のみが知られていた南アフリカの狂犬病対策史は、新たな局面を迎えることになった<sup>(注1)</sup>。第4章「野生の『猫』に注意——南アフリカ在来の狂犬病——」では、これらの野生動物に狂犬病ウイルスが確認されるまでの感染症研究と、その科学的知見をもとに1930年から実施された、ミーアキャットの大規模な撲滅計画が取り上げられる。ポート・エリザベスでの流行が鎮静してから、狂犬病は南アフリカの公衆衛生政策において優先的に取り組まれる対象ではなくなっていた。また、現在では狂犬病は、犬やキツネ、オオカミなどのイヌ科動物だけでなく、北アメリカではスカンクやラクーン、南アメリカではチスイコウモリといった多種の動物が媒介することが知られているが、当時の南アフリカの白人たちは、犬に噛まれることで感染するものとしてしか認識していなかった。しかし、このようななかで一部の医師や科学者は1910年代から個人レベルで調査をおこなっており、アフリカ人の直接経験と在来の知識に依拠しながら、野生動物によって媒介される狂犬病が南アフリカに歴史的に存在してきたことを明らかにしていた。クルーガー国立公園など野生動物保護区での流行を危惧した政府は、これらの科学者の主導のもとでミーアキャットの撲滅計画に着手する。ミーアキャットが起きださない早朝のうちに巣穴にシアン化ガスを注入するというこの計画は、環境への影響や自然の平衡状態を崩すなどといった理由で、開始当初から批判をとまっていた。この計画は、最終的には長期的な成果が上がらなかったために1970年代後半に終了したとはいえ、後世に「野生動物に流行した狂犬病は、どうすればコントロールできるのか」という困難な問いを投げかけることになったのである。

第5章「狂犬病に感染した犬と、狂暴化したジャッカル——イヌ科動物への狂犬病の再来——」では、ポート・エリザベスでの流行から約半世紀たった1950年代から南アフリカとその周辺国でどのように狂犬病ウイルスがイヌ科動物のあいだに広がり、また人々がこれにどのように応じたのかについて検討される。もとは北ローデシアで犬やジャッ

カル (*Canis mesomelas* と *C. adustus*) などが感染していた狂犬病ウイルスは、植民地統治のもとで交通網が整備され、都市や鉱山などへの人の移動が活性化すると、この環境を利用して次第に南下を開始し、1950年代には南ローデシアと南アフリカに到達した。狂犬病は人命を危険にさらしただけでなく、白人が牧場で飼育していた牛や、私設の野生動物保護区内で飼養されていたクーズー (*Tragelaphus strepsiceros*) に感染を広げることによって経済的な損失をもたらし、この流行に際して、新しく輸入・開発されたワクチンが多数の犬に接種され、狂犬病のコントロールに一定の貢献をした。しかし、ワクチン接種の安全性や効果を疑問視する声もあり、また、南ローデシアでは1960年代からの内乱のためにワクチン接種を実施する体制自体が崩壊してしまう。従来と同じく狂犬病対策の中心となったのは、感染地域の隔離や飼い犬への口輪の装着、野犬と野生動物の殺処分といったやり方であり、とくにウイルスのおもな媒介者であったジャッカル<sup>1</sup>の殺処分については、それがアフリカ農民の日常的な活動に沿うものであったため積極的に取り組まれた。また、野生動物であるジャッカルが狂犬病のおもな担い手となったことで、流行の際に顕現した対立軸はポート・エリザベスの際のようにアフリカ人と白人のあいだにではなく、抽象的な意味で自然と人間のあいだに設定されることにもなった。

第6章「街路を恐怖が襲う——クワズールー・ナタール州における狂犬病の都市化——」では、南アフリカ共和国のクワズールー・ナタール州で、1960年代から現在にいたるまで断続的に流行している狂犬病について、環境、政治、社会経済の諸側面から考察されている。ジャッカルがほとんど生息していない当州では、ウイルスはおもに飼い犬を媒介者としながら感染を広げていった。感染症が拡大するうえで新たな環境となったのが、1980年代以降急速に成長した都市と、その周辺に生まれたスラム街である。とくに、アパルトヘイト政策のもとでアフリカ人を民族集団ごとにホームランドに居住させていたために、クワズールーのホームランドとその他の地域で狂犬病に対して統一した政策をとることができないという問題があった。また、モザンビークの反政府組織であるモザンビーク民族抵抗運動を南アフリカ政府が支援したためにモザンビークの内戦は

長期化し、結果として、感染症の制御能力を失ったモザンビークから国境を接するクワズールー・ナタール州へと、難民とともに狂犬病に感染した犬が流入してくるようになった。すなわち、アパルトヘイト体制下で南アフリカ政府がとった対内的、対外的政策は、自国だけでなく周辺国の狂犬病管理を困難にする結果となったのである。

終章にあたる第7章「ウイルスは生き続ける——狂犬病コントロールのための新しい問題と、これまでの取り組み——」では、この章までに議論されてきたいくつかの主題と関連づけながら、南アフリカの狂犬病コントロールが現在直面している諸課題が述べられている。具体的には、HIV/AIDSの流行が狂犬病管理に及ぼす影響と近隣国の狂犬病管理の重要性、リカオン (*Lycaon pictus*) など狂犬病に対して脆弱な野生動物の保護、ウイルスの変異への対応といったトピックが言及される。

### III

本書は、狂犬病のウイルスが、植民地体制下の南部アフリカで急激に変化を遂げつつあった政治的、社会経済的状况を利用しながら、政府によるコントロールの試みをかい潜りつつ感染の範囲を拡大し、流行を繰り返してきた歴史を描きだしている。この過程は、狂犬病を含む感染症に関する科学知が発展し、科学研究が制度化されるという一連の流れと並行していた。そのために、狂犬病はそのときどきの科学知だけでなく、当時の白人が抱いていた人種的に階層化された想像力のなかで理解を与えられ、対処されることになった。それぞれの時期と地域における狂犬病の流行に際して社会的、文化的、医学的に何が問題とされていたのかを丹念に再構成した本書は、今日の医療史研究の好例という評価を得るにいたっている [Hünigler 2013]。

コロラド州立大学の歴史学者スンセリは、アフリカ人が狂犬病の歴史をどのように認識していたのかを、本書が捉えていない点を批判している [Sunseri 2012]。オーラルヒストリーの手法を用いず、もっぱら白人が著した旅行記や新聞、行政文書、学術論文といった資料にもとづいた本書は、たしかにそのような印象を読者に抱かせるところがあるのかもしれない。しかし、本書がアフリカ人による狂犬病の

認識それ自体を標的にしたものであるというよりは、その認識の科学知との関係や意義の変化を問題にしたものであったという点には、留意する必要があるだろう。著者の問題意識は、本書刊行の2年前に*African Affairs*誌に掲載された共著論文でより明確に述べられている。この論文で著者らは、1990年代までのアフリカ史研究が植民地科学者の社会的地位や、抑圧的な植民地政策に対する科学知の寄与といった主題に集中してきたことを指摘している。その上で、それまでほとんど描かれてこなかった科学者の経験の多様性やアプローチの開放性、一国のみならず帝国の範囲を越えて張り巡らされた科学知のネットワークといった主題の意義が強調されている[Beinart, Brown and Gilfoyle 2009]。南部アフリカで狂犬病に関する科学知が、アフリカ人社会の経験と知識を取り込み、フランスやドイツで発見された知見に依拠しながら徐々に発展していく様子を描き出した本書は、そのような方法的意識に立脚したものとして位置づけることができるだろう。本書の最後に著者は、人々が世界中でそれぞれ異なるかたちで遭遇、対応してきた狂犬病に関する比較史的研究を呼びかけているが、狂犬病以外の感染症についても、同様の方法的意識から歴史を描く意義は大きいように思われる。

(注1) 本書では、ミーアキャットという呼称が、キイロマンガース (*Cynictis penicillata*) やミーアキャット (*Suricata suricatta*) を含むマンガース科動物の総称として、あるいはより特定のキイロマンガースを指すものとして用いられている (p. 82)。紛らわしいため、注意が必要である。

### 文献リスト

- Beinart, William, Karen Brown and Daniel Gilfoyle 2009. "Experts and Expertise in Colonial Africa Reconsidered: Science and the Interpenetration of Knowledge." *African Affairs* 108(432): 413-433.
- Hünniger, Dominik 2013. "Mad Dogs and Meerkats: A History of Resurgent Rabies in Southern Africa. By Karen Brown." *Environment and History* 19(1): 111-114.
- Sunseri, Thaddeus 2012. "Of Vectors and Veterinary Science: Mad Dogs and Meerkats: A History of Resurgent Rabies in Southern Africa. By Karen Brown." *The Journal of African History* 53(2): 261-263.

(京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員)